

引用

その人の歴史的感受が現れる身近な例に、引用というものがあると思う。過去に書かれた無数の本のなかから、どの本のどの部分を抜き出し、どのような目的でどのように現在させるのか。引用の目的は、原典に対して好意的な場合ばかりではないが、過去のテキストに批判的・否定的だからといって、それがそのまま歴史的感受がないということにはならない。しかし一方で、原典に対して好意をもつての引用であれば、何はともあれ、そこに歴史的感受を見いだすことはできるかもしれない。要するに問題は、引用者がどれだけ元のテキストの声を聞き、それが引用者のなかで生命を持っているかだろう。好きという感情は、その対象が自分のなかに生きている状態だと、とりあえずは言っていると思う。

「言葉」という単語は、もともと「ことの端」を表していたらしい。つまり決してそれ自体で完全なものではなく、ものごとの端っこを捉えたものに過ぎないということだ。だからその端っこから、いかに《本体》の存在に思いを寄せることができるか。そのことがあらゆる引用という行為において、そこに歴史的感受を見いだせるか否かに関わっていると思う。例えば自

分の文章を権威づけたり自分の博学を示したりするために著名な人物の言葉を引いていると感じさせるものは、言葉を「ことの端」ではなく物質的に捉えているだろうし、過去との連続よりも、連続しているかのように見せたい「今、ここ」の絶対化を願っているだろう。死者にはそのまま眠っていてほしい。そこで実際に死者が甦ってきて、「お前に引用される筋合いはない」とは言われたくないのだ。自分の主張を正当化・正統化するために引用がされる場合も、言葉をあくまでそれ自体で完結する情報としてのみ扱っているなら、引用文は道具として引用者に従属した無時間的なものになり、そこに歴史的感受は見いだしづらい。

引用という言葉の範囲は超えているが、この特集でT・S・エリオット、吉田健一、大江宏らがしばしば登場するのは、彼らの生のようなものを誌面に現在させたいという意味で、ここまで書いてきた引用のあり方と重なっている。この三人に関しては、召喚という言葉のほうがかっこよくあるかもしれない。彼らの存在はこの特集の役に立っているが、同時にこの特集は、彼らの存在あるいは存在の意志に役に立っているのではないかと思っている。もともと『建築と日常』は引用が多い媒体だが、今回はさらに

意図的に、各インタビューなどでの引用も増やしている。そこに歴史的感受が見いだせるかどうかは読む人次第だとしても、様々な時間空間の言葉を「今、ここ」に現在させ、多様な雑誌空間を構成することが、「現在する歴史」特集の表現の一つになるという意識があった。

しかし自分自身で短い文章を書く場合には、なるべく引用なしで済ませたいという意識もある。それは先ほどの権威主義とも関係するのだが、外部から引用をすることで、文章の有機的一が崩れ、また読者の意識も出典のほうに漏れ出てしまうという感覚がある。文章には出典や参照元を明記しなければならないという気持ちも一方で強いのだが、引用文を自分の文と地続きにしたい。言ってみれば、私が引用するある種の文章は、そこで直接引用されることに先立って、そもそも私にその文を書かせる要因（の一つ）にもなっている。過去の様々な言葉が私のなかに現在していて、そのことが私の私の認識や思想を形成している。だから、むしろ引用文としてそれらを区別して登場させるよりも、自らの文章に内在化させられるならそのほうが、かつてその言葉が発せられた時の意志に近づくような気がするし、それも「現在する歴史」の一つのあり方であるように思う。